

# 2024年

## 春の読書感想文・課題作文優秀作品

### 【小学部・読書感想文】

「魔女だったかもしれないわたし」を読んで

センター北校 M・Aさん（南山田小）

この物語は、自閉的な主人公アデイがいじめや差別を受けながらもたくさんの出来事を通して成長していく物語だ。

私は、アデイの学校の教師であるマーフィ先生をいく感じる。今までにこんなひどい人には会ったことがない。マーフィ先生ほど差別する人がどこにいるだろうか。しかし、アデイは私のように人をうらんで悪口を言ったりしないし、いじめたりもしなかった。差別されても大木みたいにじっと動かない強い心を持っていた。それに比べて、アデイの学校のクラスメイトは木の葉だ。一度強いものに当たると風にふき飛ばされるようにすぐににげ去る。それに、他の子がいじめを受けていても何もしない。ここまでアデイとちがうなんて本当にだめな子ばかりでおどろいた。

しかし、そんなアデイでも、私は止めた方がいいと思うことが一つある。それは人に自分をかくすことだ。私は仮面をかぶったアデイより、ありのままのアデイの方がずっと好きだ。それに、アデイの大好きな先生や友達や家族もきっとそう思っているだろう。だから、仮面なんかぬぎ捨てて、本当の自分を他人に理解してもらえばいい。

アデイが言っていたが、大昔の何世紀も前に人たちがうだけで魔女と決めつけられた女性がいたらしい。これも差別の一つだ。この物語を読んで、改めて人を差別してはいけないと思った。私は、これからもっと障がいすることも理かいて、一人一人の個性も大切にできる人になりたい。

「ことばハンター」を読んで

鶴川校 N・Aさん（鶴川第二小）

私がこの本を読んだきっかけは、本の見た目とことばハンターと言う題名が面白そうだったからだ。

この本は、登下校する時も国語辞典を読んでもしまうほど言葉が大好きな筆者の話だ。そんな筆者は、本やテレビ、インターネットや街の中など、日常にある言葉に注目するというワードハンティングをしながら、国語辞典の編集に携わっている。

私が印象に残った話は、筆者が考えるこれからの国語辞典の役割だ。最初の国語辞典の役割は、その言葉をどの漢字で書いたら良いかを示すものだった。次は言葉の意味を説明することに変わった。これからは、ためになる言葉遣いの説明や困った人々の悩みを解決する国語辞典を目指しているようだ。その例として、年代によって言葉の受け取り方に違いがあると言う話が紹介されていた。

電車で席を譲られたときにお年寄りが悪気なく言った「けっこうです」という言葉が、言われた人にとっては余計なことをしてしまったと感じることがあるらしい。もし国語辞典に「大丈夫です」という意味や「遠慮している感じ」という説明が書かれていたら、言われた側が嫌な気持ちになることはないかもしれない。

筆者は、日常生活にある身近な言葉に目を向けるワードハンティングをすることが、正しく言葉を理解するための基本だと伝えたかったのだと思う。

この本を通して何気なく使っている言葉がどんな意味なのかを知るきっかけとなった。今までは国語辞典で調べようと思わなかったけれど、国語辞典に興味を持ったのですぐ買いに行った。今は毎日、ページをめくって気になる言葉を見つけてはその意味を読んでいる。そして、日常生活の中でワードハンティングをしながら言葉についてもっと知ることができるようになりたい。

# 【中学部・課題作文】

新人賞

※課題作文に初挑戦の中学一年生の中から選出

成瀬校 O・Mさん（成瀬台中）

私は以前、ハムスターを飼っていた。飼う前に、特徴や飼い方や種類など様々なことを調べ、家族と何度も相談して飼うことを決めた。しかし実際に飼ってみると下調べとは異なる「可愛い」以外の大変さもあった。

資料Iを見ると、飼いたいけど飼えない人がいることがわかる。世話が大変で、負担が大きいため飼えない人がいる。また資料IIを見ると、犬より猫の飼育数が年々増えているということがわかる。犬に比べると、猫の方が世話の負担が少ないためか、より飼育数が増えている。

第三段落で筆者は、その理由を「犬は猫よりしつけや散歩などで手間がかかる」「住環境の変化」と二つあげているが、私もその通りだと思う。そして私ももう一つ、動物愛護の観点から様々な問題が取り上げられている現在、安易に飼わないよう、命を大切に考える人が増えているのも理由と考える。

ペット共生社会を実現するために、私は課題が二つあると考える。一つ目は、ペットが好きな人と、苦手な人やアレルギーなど様々な理由で飼えない人がいるということだ。どちらも尊重されるべきで、それは障害を持った人や、高齢者や小さな子供や外国人の方と共生することと同じである。二つ目は世話に対する負担と不安である。飼い主が怪我や病気になったときに、誰にペットの世話をお願いするかと言うことと、鳴き声などの騒音問題である。この二つの問題を解決するために、乗り物でペット同乗可の車両や便を作ることや、防音効果の高いペット可の住居を増やし、ペット保育園のような施設を常設することだ。それによりペットも過ごしやすく、飼い主への負担も減り、苦手な人は我慢することなく過ごせるようになると思う。

このペットとの共生社会を実現することは、様々な人や生き物が尊重され、共生することにつながるのではないだろうか。私は、命の大切さや命の重さを常に頭に置き、今後も生活していきたい。

中山校 S・Nさん（中山中）

私は来年、犬を飼うと以前から家族と約束をしていた。私にとってペットは家族の一員であり、いつも私たちを喜ばせ、笑顔にさせてくれる存在だと考えている。祖父母が犬を飼っており、祖父母の家に行くたびにその可愛らしい姿に癒される。私が犬を飼いたいと思う理由は、その幸せな時間を祖父母の家にいる時だけでなく、毎日のように過ごしたいと思うからだ。だがこの課題文を読んで、犬を飼うことに対し改めて深く考えさせられた。

資料Iを見るとどちらも犬が一位、猫が二位を占めているということが分かるが、資料IIを見ると犬の飼育頭数は年々減り、反対に猫の飼育頭数は年々増えている事が読み取れる。ここから、犬を飼うことには何らかの抵抗があることが分かる。

課題文で筆者が述べている二つの理由に私も共感する。なぜなら、ペットとの共生社会はライフスタイルの変化に大きく左右されると思うからだ。また他にも、少子化や飼育費用の増加によって飼うことに抵抗を感じるなど、他にもたくさん原因があると思う。

この課題文を読んで改めてペットを飼うことの難しさ責任の重さ、そして命の大切さについて痛感させられた。ペットとの共生社会を実現するために、まずは一人一人が動物について深く理解することが大切だ。共生する上での生活様式や社会的なルールとマナー、また動物が好きな人嫌いな人やアレルギーがある人ない人に対し、どのように対応していくかなど、様々な角度から考えていくべきだと思う。現在、「スターフライヤー」という航空会社でペットと客室に同乗できるサービスがある。また他にもペットと同乗できるようなサービスが増えている。このような取り組みを今後も増やしていくために、まずは一人ひとりが相手の立場に立って物事を考えられるように意識を変えていくべきだと私は考える。

成瀬校 A・Rくん（成瀬台中）

私の家にはペットがいる。金魚だ。私が四歳の頃から飼っていて、現在金魚は十歳。私の妹よりも年上だ。私にとって、ペットは重みのある存在である。なぜならペットも人間と同じくらい大切な一つの命であり、人間と同じように大切な存在だからだ。

資料Iの二つのグラフでは、現在飼っているペットと今後飼いたいペットの種類の方とも、犬と猫の割合が多い。また資料IIでは、犬猫ともに二〇一九年から二〇二〇年にかけて、飼育頭数が減少している。これらから、特に犬と猫は飼いたいけれども飼うことができない状態にあることがわかる。おそらく、新型コロナウイルスの影響もあっただろう。

課題文で筆者は理由を二つ述べているが、私もそう思う。犬は実際に散歩する時間や費用、散歩中の世話など、飼い主にかかる負担も大きい。また住環境についても、狭い土地に何軒も家を建てるため、トラブルの元となることも考えられるだろう。一方で、猫は屋外で生活することが少ないため、新型コロナウイルスのような感染症の持ち込みも防止できる。

ペット共生社会を実現するためには、ペットも人間と同じように面倒をみる必要があると私は考える。例えば、電車に女性専用車両を設けたり、駅周辺に喫煙所があったりする。これを応用して、動物と飼い主が一緒に過ごしたり、移動したりするための専用のスペースを作ることはいらないだろうか。作るには時間がかかるだろうし、電車の場合は乗り降りや動物アレルギーの人をどうするかといった課題も出てくるだろう。ここで大切なのは、ペットの命も大切な一つの命だという考えだ。様々な課題が出てきても、ペット共生社会の実現への試みを放っておくわけにはいかない。人はもちろん、動物も暮らしやすい「共生社会」実現のために、私自身もこれから社会に出ていく身として考え続けていきたい。

## 【講師の部・課題作文】

センター北校 川澄琢朗

私はペットを飼ったことが無い。しかしそれは動物嫌いだからではない。寧ろ犬や猫といった動物を愛くるしいと思う分、ペットとの死別に耐えられる自信がないからだ。動画サイトでペットの動画はよく見ており、私にとっても彼らは癒しをくれるかけがえのない存在だ。

資料Iの二つのグラフから、ペットの中でも犬、猫の人气が際立っていると分かる。犬が一番目、猫が二番目の人気ペットとなっているが、資料IIを見ると犬の人气は年々低下し、代わりに猫の人气が上昇していることが分かる。

課題文で筆者はその理由を二つ述べており、私もその理由に賛同する。特に社会構造の変化による影響が大きく、筆者の挙げた住環境の変化以外にも要因があると感じる。SNSなどによる監視社会への不満、先行きへの不安など、現在の社会に息苦しさや疲れを感じる人々が多い。そのため、自分とは逆に自由気ままな行動をする猫に社会の喧騒からの癒しを感じる側面もあるのではないだろうか。

ただ、いまの私と筆者の視点には喜ばしくない共通点がある。それは人間の視点、尺度で犬や猫を見ているということだ。ペットとの共生社会が志向される今、必要なのは逆にペット側の視点に立つことだ。単純なことだが、ここを軽視した結果のペットの遺棄が長年問題となっている。現状の改善には購入時に飼う動物に合った環境を十分整えることが不可欠で、購入の窓口であるペットショップの指導が果たす役割は大きい。しかし衝動買いを誘うようにショップで動物を展示するばかりの店も依然多い。そこで私はペットショップの改善を提案したい。例えば店側が飼い主の飼育環境を購入前に確認し、合格の場合にのみ購入を許可するペットの免許制の導入は、共生社会の為の環境作りに大いに有用だ。

ペットの暮らしやすさを軽視して共生社会を目指す、共生を強制する社会となってしまう。ペットのための環境整備の大切さを私も忘れずにいたい。

私はこれまでに魚や昆虫、ウサギを飼っていた。どちらも餌やりから小屋の掃除、ウサギの場合は部屋や庭での散歩などの世話をしてきた。費やした時間や愛情の分だけの「幸せ」と、自分のペットが死んでしまった時の「冷たさ」を今でも鮮明に思い出すことができる。

生き物を飼うことで、幸福と責任、そして生命の死を実感した。社会性動物であるヒトは同種でのコミュニケーション内で十分に生きていける。しかし、他の生き物と共生することで新しい経験や幸福、価値観を得ることができると。ペットとは、人生を「豊か」にしてくれる存在だと言えるだろう。

資料Ⅰから、猫よりも犬を飼いたい人が多いことがわかる。一方、資料Ⅱから、実際は犬の飼育頭数が年々減少し、猫の方は増加傾向にあると言える。ここから、飼いたいペットを実際に飼うことは容易な話ではなく、何かしらの障害があるのだと推察できる。

こうした現状の原因について筆者は、ペットを飼う際の飼い主への負担と住環境への配慮の2点を述べており、私も同意する。この2つの理由は実際に身の回りでも見受けられる事案であり、ペットを「飼えるかどうか」の条件となっているだろう。

現代社会では、多文化共生、性的マイノリティ、外国人労働者問題など、自分と他者との関わり方に関するテーマが存在している。これらの多くで解決策として「相手の理解をするための心のゆとりを持つ」という考え方が重要視されているが、ペット共生社会の実現にもこうした「心のゆとり」が必要になるのではないだろうか。ゆとりとは、時間的、精神的、金銭などによって形成される。また、人は、ゆとりがない時、本来許容でき共存できるものを気付かぬうちに否定してしまうものだ。ペット共生社会を実現するためにも、人々の暮らしの中で誰もが「ゆとり」を持てる社会を築き上げることが鍵となるだろう。私自身も「ゆとり」がない時にこそ他者に優しくなれる人間でありたいと思う。